

農村生活体験の受け入れに参加してみませんか

おうしゅうG T推進協議会では、教育旅行の生徒などを受け入れたいという農家を募集しています。

この農村生活体験の提供は、体験する人はもちろんのこと、受け入れ農家も大きな感動が得られます。一緒にその感動を味わってみませんか。

■内容 農村生活体験

※農作業はもとより、食事の準備や片付けなど、ありのままの農村生活を提供するものです。家族とのふれあいを十分に深めていただきます

■受入時期 主に春（4～6月）と秋（9～11月）

※希望制で受け入れ可能な日程のみでも可

■基本日程 1泊2日または2泊3日

※日帰りの農業体験を受け入れる場合もあります

■受け入れ人数 1戸当たり4人前後

■体験料収入 生徒1人当たり1泊3食で9,800円（食事数などにより変動あり）

※うち18%はおうしゅうG T推進協議会の運営費として控除した後の支払いになります

■その他 体験メニューの提供内容など、遠慮なくご相談ください

■問い合わせ・申込先 おうしゅうG T推進協議会事務局（本庁農政課農政係・内線363）

農業の新たな魅力を発見する取り組みとして、G Tは非常に有効です。高齢農家や小規模農家などが中心の地域でも、G Tに携わる農家が増え、より多くの都市住民を迎えられることで、農村地域の活性化が期待できます。

及川さんは、教育旅行の受け入れを経て、ワーキングホリデーの受け入れを行ない、簡易宿所営業の許可までも取得。このような活動もG Tのひとつの形であり、農村に活力を与えています。しかし、農家民泊だけが直接的に地域を救うわけではありません。余裕のある時間の範囲で農業体験などを受け入れることにより、それぞれの経営にプラスになり、その結果として地域の活性化につながります。農家それぞれに合った農業体験などを受け入れ、身の丈に合った形で交流することがG Tの理想なのです。

また、2016年の「希望郷いわて国体・希望郷いわて大会」の開催が決定し、本市もさまざまな種目の競技会場として計画されています。さらに、I L Cにおいては、研究者組織が国内候補地として北上山地を選定しました。今後は、さらに市外の人たちを容易に迎えられることができる環境を作っていくかなければなりません。

農村と都市との絆を強くし、その交流を継続的に行うことで、本市の良さを全国に発信し続けることができます。そして、それが本市の明るい未来につながっていくと期待されています。

未来

リデールの受け入れを行い、簡易宿所営業の許可までも取得。このような活動もG Tのひとつの形であり、農村に活力を与えています。しかし、農家民泊だけが直接的に地域を救うわけではありません。余裕のある時間の範囲で農業体験などを受け入れることにより、それぞれの経営にプラスになり、その結果として地域の活性化につながります。農家それぞれに合った農業体験などを受け入れ、身の丈に合った形で交流することがG Tの理想なのです。

また、2016年の「希望郷いわて大会」の開催が決定し、本市もさまざまな種目の競技会場として計画されています。さらに、I L Cにおいては、研究者組織が国内候補地として北上山地を選定しました。今後は、さらに市外の人たちを容易に迎えられることができる環境を作っていくかなければなりません。

農村と都市との絆を強くし、その交流を継続的に行うことで、本市の良さを全国に発信し続けることができます。そして、それが本市の明るい未来につながっていくと期待されています。

金剛高校の生徒が乗ったバスを見送る菅原恵美子さんと受け入れ農家の皆さん



胆江農村ワーキングホリデー研究会事務局
及川久仁江 さん(50)

24年5月からワーキングホリデーにも取り組む。昨年、簡易宿所営業の許可を取得。水田面積は1.2haで、畑の面積は20a。夫と息子2人、娘2人、そして母の7人家族

胆沢区の及川久仁江さんは、「G Tにより、農家の子どもがその体験する姿などを見て、自らが考える機会になり、それが結果的に後継者育成にもつながります」と語り、「自分たちの農村をどう守っていくべきか、それを考える上で人と人とのつながりは、大切なことを教えてくれるような気がします」と話します。農村住民は、普段接点のない都市住民（消費者）の声を直接聞くことができ、栽培や販売方

地域としての効果

法の改善に向けて新鮮な意見を得ることが出来ます。

また、村上会長は「子どもたちが都市に戻っても、奥州産のものを気に掛けて買ってくれます」と語り、農村を舞台とした交流をきっかけに、地域の良さを都市に伝える絶好の機会になっています。

課題

時期的な課題

G Tにおいて、修学旅行を中心に受け入れている場合、時期的な集中が大きな課題となります。村上会長も、「5月の受入人数が多く、午前中にお別れし、午後に次の学校が来る場合もある。そうすると、事前準備が大変です」と漏らします。全国的に、修学旅行の約8割が4月から6月までの間に集中。おうしゅうG T推進協議会は、生徒数300

農家個々の受け入れ体制の構築

新たに農業体験の受け入れなどを始める場合において、家族の理解と協力は不可欠です。農業体験の受け入れは、農作業の指導を行うだけでなく、食事や身の回りの世話、会話の相手などさまざま。家族全員が、受け入れに寛容な



イベントでのPR活動

人以上の大規模な受け入れも行っており、その場合、強行な受け入れ日程を組まざるを得ないこともあります。この状況を改善するため、「受け入れ農家を少しでも増やし、十分に対応できる体制を構築したい」と村上会長は今後の目標を話していました。

費用面の課題

食費に係る経費が高額になると、受け入れ農家の負担感が増し、長続きしないこととなります。

「家族の一員として受け入れ、ありのままの農村生活を一緒に楽しむのがG Tです」と菅原さんは語ります。農業体験の受け入れは、都市住民を歓迎しながらも「お客様扱いしない」という姿勢で、過度な負担にならないよう工夫



受け入れ農家の思い出の品々



生徒からの手紙は感動します

が必要。食事も、農村の郷土料理や普段どりのもののほうが都市住民には喜ばれます。

◆ 今後の、農業体験の受け入れを継続していくためには、受け入れ側の充実が必要です。菅原さんは、「人生経験を多く積んでいるため、G Tにおいては、年齢もひとつの売り。岩手の「おじいちゃん」「おばあちゃん」と、その後も慕われて交流があります」と言いながらも「受け入れ農家の高齢化はG Tのみならず、農村において将来的な不安。後継者育成が最大の課題ではないでしょうか」と話します。

また、地域としても、都市との交流を行う上で、優れた景観の保護や新たな特産品づくりなども求められます。

※ … 教育旅行の受け入れと異なり、体験料などをいただくず、その対価として労働力を提供していただくもの